

知識のかぎ

榊原康夫

ひとりの律法学者がイエスに答えて言った、「先生、そんなことを言われるのは、わたしたちまでも侮辱することです」。

そこで言われた、「あなたがた律法学者も、わざわいである。負い切れない重荷を人に負わせながら、自分はその荷に指一本も触れようとしない。

あなたがたは、わざわいである。預言者たちの碑を建てるが、しかし彼らを殺したのは、あなたがたの先祖であったのだ。だから、あなたがたは、自分の先祖のしわざに同意する証人なのだ。先祖が彼らを殺し、あなたがたがその碑を建てるのだから。それゆえに、『神の知恵』も言っている、『わたしは預言者と使徒とを彼らにつかわすが、彼らはそのうちのある者を殺したり、迫害したりするであろう』。それで、アベルの血から祭壇と神殿との間で殺されたザカリヤの血に至るまで、世の初めから流されてきたすべての預言者の血について、この時代がその責任を問われる。そうだ、あなたがたに言うておく、この時代がその責任を問われるであろう。

あなたがた律法学者は、わざわいである。知識のかぎを取りあげて、自分がいらないばかりか、はいろいろとす

る人たちを妨げてきた」。

——ルカによる福音書一一・四五—五二——

ここには、*「律法学者の三つのわざわい」*が語られていて、先にある*「パリサイ人の三つのわざわい」*（三七一—四四）と対をなしています。これらは、マタイによる福音書二三章では、一括して*「七つのわざわい」*に並べられているものですが、ルカは、「ひとりの律法学者」の抗議を境として、三つずつ二組に区別したのでした。

「ひとりの律法学者」が、「そんなことを言われるのは、わたしたちまでも、侮辱することです」と抗議したとおり（四五）、ここに扱われるのは、一般のパリサイ人とは違って、その中の特殊な人々、つまり聖書の学者・神学者のことです。

彼らの陥っていた「わざわい」をとおして、このような特殊な専門家が陥りやすい危険に注意したいと思うのです。

当時のユダヤ教律法学者は、三つの点で「わざわいである」と言われます。

第一のわざわいは、*「一般信徒への無用性」*でした。「あなたがた律法学者も、わざわいである。負い切れない重荷を人に負わせながら、自分ではその荷に指一本でも触れようとしなない」（四六）。

律法学者が負わせていた「荷」とは、学者が律法にくだしていた無数の聖書注釈のことです。

「モーセは律法をシナイ山から受けて、ヨシユアに委ねた。ヨシユアはそれをかの長老たちに委ね、かの長老たちは預言者たちに委ね、預言者たちは大会堂の面々に委ねた。彼らは三つのことを言った、『さばきは思慮深くせよ、多くの弟子をおこせ、そして律法のまわりに垣根をめぐらせ』（『シシユナー』アポート一・一）。そうして、「注釈こそ

律法の垣根である」のでした（『タルムード』ピルケー・アポート三・一三）。このような注釈をする律法学者の権威は、神の権威とまで重んじられたのです。「ラビ・エレアザル・ベン・シヤムアは言った、『あなたの弟子を尊ぶこと、あたかもわが子を尊び友を尊ぶがごとくにせよ。友を尊ぶこと、教師を恐れるがごとくにせよ。教師を恐れること、天を恐れるがごとくにせよ』（『シシユナー』アポート四・一二）。

さて、律法学者がわざわいなのは、このような荷を一人に負わせる「ことではありません。あるいは、「重荷を人に負わせながら」、自分自身は「実行しない」こと（マタイ二三・三）でもありません。ルカによると、荷を負う人々に「指一本でも触れようとしなない」冷淡さ、なんの助けも与えない無用性にあるのです。

宗教が民衆にとって、救いとならず喜びとならず、ただの「重荷」となるだけならば、なんの意味がありません。キリストが福音をたずさえて民衆を招かれたのは、このような状況にたいしてでありました、「すべての重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。……わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」（マタイ一一・二八—三〇）。

キリストの宗教にも、神学的くびきはあり、聖書注釈の荷はありますが、それは、負いやすく、軽く、心が内に燃えるような積義であります（二四・三二）。

第二のわざわいは、学者の自己満足・自己充足による閉鎖性にありました。

「あなたがたは、わざわいである。預言者たちの碑を建てて、しかし彼らを殺したのは、あなたがたの先祖であったのだ」（四七）。律法学者たちは、一見、旧約預言者に味方し、預言者を迫害した背教のイスラエルを憎み悲しむようにみえました。しかしじつは、殺したのは「あなたがたの先祖であったの」です。ひとごとではない、共犯者な

のです。それはただ血のつながりがあるという以上に、「先祖が彼らを殺し」、子孫の「あなたがたがその碑を建て」て仕事を完了させるといふ、仕事の一貫性があるからです(四八)。「それゆえに」、今後つかわれるキリスト教「預言者と使徒とを」殺すであろうことは、見えすいています(四九)。

「それで、アベルの血から祭壇と神殿との間で殺されたザカリヤの血に至るまで、世の初めから流されてきたすべての預言者の血について、この時代がその責任を問われる」(五〇)。「アベルの血」は、ヘブル語旧約聖書經典の開巻へき頭にしろされた、アベルの血の叫びのことです(創世四・一〇)。「ザカリヤの血」は、ヘブル語旧約聖書經典の最後におかれる歴代志下二四章二二節で、「どうぞ主が、これをみそなわして罰せられるように」と折って死んだ祭司ザカリヤの死のことです。つまり、旧約經典の初めから終わりまでのすべての殉教の責任が、この時代に問われる、というのです。「そなた、あなたがたに言っておく、この時代がその責任を問われ」て(五一)、紀元七〇年の神殿とエルサレム滅亡に結果するのです。

これほどに首尾一貫した預言者殺しは、決してふとした過失ではありません。律法学者の原理的な誤りにもとづいているはずで、それは、彼らが、自己の教説によって閉鎖的な世界観・歴史観・神観を打ち立てていたということです。彼らには、自己の教説に合わない新しい啓示を入れる余地がありません。律法をあらゆる新しい啓示から守る垣根をめぐらし、閉鎖的な自己充足に満足していたのです。

第三のわざわいは、他人の求道への妨害にあります。「あなたがた律法学者は、わざわいである。知識のかぎを取りあげて、自分がいらないばかりか、はいるうとする人たちが妨げてきた」(五二)。

ここでいう知識とは、単なる頭の知識ではありません。「はいらない」とか「はいるうとする」と言われているように、神の救いの御国にはいる信仰的知識のことです。それで、マタイによる福音書二三章一二節では、「天国を閉ざす」とさえ言われています。

律法学者には、律法を解説し聖書の知識を教授して、人を救いに入れる「かぎ」がありました。ところが彼らは、その「かぎ」である聖書解説を民衆から取りあげて、「自分がいらない」——「神のみこころを無にした」(七・三〇)——ばかりか、「はいらうとする人たちが妨げてきた」のです。彼らは、素朴な信者や純真な求道者の助けに「指一本」かさぬだけでなく、むしろ「妨げてきた」のです。たとえば、生まれつきの盲人がイエスによって救われ感謝していたとき、彼らは「その人は神からきた人ではない。安息日を守っていないのだから」と律法を解説してみせて、入信を妨げたのです(ヨハネ九・一六)。彼らは、無益どころか有害でさえありました。

さて、生前のイエスが、ユダヤ教律法学者のわざわいを指摘されたこの言葉を、ルカは、異邦人テオピロに、なんのために書き送ったのでしょうか。ただ、以前にユダヤにはこんなに有害無益な学者がいたものだ、という知識を伝えたいのでしょうか。どうも、そうとは思えません。ルカは、彼の時代、新約の時代に、キリスト教会に生じつつある問題に、主のみ言葉を適用しているとしたか考えられません。

そのヒントは、四九節にあります。「それゆえに、『神の知恵』も言っている、『わたしは預言者と使徒とを彼らにつかわすが、彼らはそのうちのある者を殺したり、迫害したりするであろう』」。

『神の知恵』も言っている「と現在形に訳すと、まるで、今は失われた『神の知恵』という書物でもあって、ちょうど『ソロモンの知恵』とか『ミン・シラの知恵』から引用するように、ルカが一部を引用したように感じさせます。しかし、じつは『神の知恵』は言った」という表現で、書物の引用には使われない言葉づかいです。それに、ルカの

時代にこれほど衆知のもののように引用された有名な書物が、今では跡形もなく失われてしまった、とは考えられせん。

むしろ、「神の知恵は言われた」と訳すべきです。マタイによる福音書二三章三四節では、この同じ文章を「言われた」かたも、「預言者と使徒をつかわす」ところの「わたし」も、どちらも主イエス・キリスト御自身です。それで二世紀のタチアノスは、『ディアテッサロン』の中で、「みよ、わたし、神の知恵はつかわす」と組み合わせています。「神の知恵」とはイエスのことです。

それで、神の知恵がつかわす預言者たちは、殺されたり迫害されたりするのですが、それをマタイによる福音書は、「十字架につけ」「会堂でむち打ち」「町から町へと迫害して行く」という、まぎれもなくキリスト教伝道者のうける迫害として描いているのです。

いうまでもなく、これらのキリスト教的預言者は、ただ「つかわされ」るだけでなく、「預言」をしました。つまり、生前のイエスの言行をただ忠実に記録保存しただけでなく、新しい啓示を預言し追加したのです。彼らは教会に、「主は言われた」(使徒二三・四七、一八・九、二二・一八、二二など)、「聖霊がこうお告げになっている」(使徒二三・二、二一・一一など)と言って、新しい啓示を引用し紹介しました。教会では、生前のイエスのみ言葉が「聖書」として保存収集されましたが(第一テモテ五・一八とルカ一〇・七と第一コリント九・一四)、預言者たちは靈感をうけて「主は言われた、聖霊はお告げになった」といってそれらを引用し、教会のニードに合わせて再解説し、応用しました。

このような教会にとって、「キリストは、ユダヤ人にはつまづかせるもの、異邦人には愚かなものであるが、召された者自身にとっては、ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神の力、神の知恵たるキリストなのである」(第一コリント一・二三―二四)。イエスに表わされた終末的な神の救いのみわざは、「知恵」であり、クリスチャンは「知恵の子」と呼

ばれました(ルカ七・三五)。悪霊を追い出すイエスに見られる神の指(御霊)は、邪悪な時代の求める天的しるし以上のもの、「ソロモンの知恵」にまさる神の知恵でありました(一一・二〇と三二)。

ですから、「神の知恵は言われた」というのは、初代キリスト教会預言者が、御霊に感じてイエスのみ言葉を再解釈し、「主は言われた」と引用するときの引用公式の一つにはかなりません。マタイは、それを「イエス」のせりふに直して福音書に記入しました。ルカは、そのままの文章で福音書に編集したのです。

大事なことは、ここに、イエスこそ「神の知恵」であるという教会の確信が表明されている、ということですから、恐るべきことは、わざわざイエスを「神の知恵」と呼ばねばならぬほど、早くも教会に異端的知恵が侵入しつつあった、ということです。

イエスは、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない」と主張されました(ヨハネ一四・六)。パウロも、「キリストのうちには、知恵と知識との宝が、いっさい隠されている。わたしがこう言うのは、あなたがたが、だれにも巧みな言葉で迷わされることのないためである」と警告しました(コロサイ二・三―四)。明らかに、この時代の教会には、根源的知恵であるキリストから迷い出させる「巧みな言葉」が聞こえつつあったのです。

イエスからつかわされる「預言者と使徒」たちは、マタイによる福音書では、「預言者、知者、律法学者たち」と呼ばれるようになっていきます。弟子は、「学者」と呼ばれる階層を形成しつつあります(マタイ一三・五二)。

パウロは、キリスト教会の知者たちに、「もしあなたがたのうちに、自分がこの世の知者だと思ふ人がいるなら、その人は知者になるために愚かになるがよい」と戒めねばなりません(第一コリント三・一八)。

預言者には、「もしある人が、自分は預言者か霊の人であると思っているなら、わたしがあなたがたに書いていることは、主の命令だと認むべきである。もしそれを無視する者があれば、その人もまた無視される」と叱らねばなりませんでした(第一コリント一四・三七―三八)。

ついに、「実は、法に服さない者、空論に走る者、人の心を惑わす者が多くなり……だから、彼らをきびしく責めて、その信仰を健全なものにし、ユダヤ人の作り話や、真理からそれていった人々の定めなどに、氣をとられることがないようにさせなさい」とまで警告する必要がうまれていたのです(テトス一・一〇―一四)。

キリストの教会に、福音を恥とする「知者」が現われかけていました。教会のかしらの命令にさえ従わない「預言者か霊の人」が出現し始めていました。唯一の真理キリストから「それでいって」、「空論」や「作り話」に走り、人の「心を惑わす」邪魔者が、律法学者の中に出てきました。いっさいの知恵と知識の宝がキリストに隠されていることを疑わせ、キリスト以外のところから知恵を掘り出させる「巧みな言葉」が、はやりつつありました。「そこで言われた、『あなたがた律法学者も、わざわいである』のです！」

「先生、そんなことを言われるのは、わたしたちまでも侮辱することです」と、現代キリスト教神学者は言うことができましょうか。いいえ、「あなたがた律法学者も、わざわいである」という主のお叱りを、今日も新しく聞かざるをえません。

現代のキリスト教神学界には、一般信徒に重荷を負わせ、自信を喪失させ、しかも指一本の助けにもならぬ神学と聖書学が横行かつ歩んでいます。

自己の学説・自派の教理に満足して、他人・他教派・他の神学校の教えに閉鎖的な独善の神学があります。

みずから福音の救いにはいらぬばかりか、はいろいろとする純真素朴な人々を妨げ、つまづかせるような聖書学が、はびこっています。

まことの神学は、キリストの羊たちを豊かに養うところの学でなければなりません。

まことの神学は、いつでも開かれた目と心とをもって、新しい真理の発見を喜び、聖書のより正しい意味に喜んで屈服する柔軟な姿勢をもっていなければなりません。

まことの神学は、神学する者みずから、御国の味を味わうとともに、はいろいろとする人々を助け励ます神学でなければなりません。

要するに、まことの神学は、喜ばしい音信(福音)としての神学でなければなりません。

願わくは、主が私たちの日本福音主義神学会を、そのような神学の場として聖別し、育ててくださるように、と祈ります。アーメン。

(日本基督改革派東京恩寵教会牧師、神戸改革派神学校講師)